四年国語（その一）

（2019・4・27）

組分けテスト

※ 答えは、別紙の解答らんに書き入れなさい。

※ 問題用紙は（その一）から（その六）までありますから、注意してください。

※ 字数指定のある問いは、「、」や「。」も一字として数えます。

1 ⑩ 次の――線部を漢字に直しなさい。必要ならば、送りがなはひらがなで書きなさい。

1 四谷くんは根性とドリョクの人だ。
2 貯金のリシを計算する。
3 朝顔の種がハツガする。
4 公園のとなりに家をタテル。
5 算数のサンコウ書を買う。
6 入学案内をインサツする。
7 モンゴルでユウボク生活を体験する。
8 首位をアラソウ。
9 ミズベにいる生きもの。
10 テレビ局のシュザイに応じる。

2 ㉖ 次の各問いに答えなさい。

問一 ⑧ 次の漢字の部首名を後から選び、それぞれ記号で答えなさい。

1 階　2 歌　3 頭　4 空

ア あくび　イ おおざと　ウ おおがい　エ ぎょうにんべん
オ うかんむり　カ こざとへん　キ ふるとり　ク あなかんむり

問二 ⑧ 次の熟語の読み方は、後のア～エのどれになりますか。それぞれ記号で答えなさい。

1 絵本　2 雑木　3 雨具　4 手紙

ア 上も下も音読みだけで読むもの　イ 上も下も訓読みだけで読むもの
ウ 上を音読み、下を訓読みで読むもの　エ 上を訓読み、下を音読みで読むもの

問三 ⑩ 次の言葉のかなづかいが正しいときは○と答え、まちがっているときはその言葉全体を正しいかなづかいに直してひらがなで答えなさい。

1 こんにちは　2 みかずき　3 いちじるしい　4 おうさま　5 そこじから

3 ⑥⓪ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

タチバナさんは子どものころから骨の発育が悪く、ずっとねてくらしています。今日は散歩に行くため、ベッド式の乗りものにのせてもらい、家の前でだれか歩いてくるのを待っていました。

口笛をふいていると、ミラーにちらっと人の影がうつりました。

歩いてきたのは学生のようです。

にきびづらをした青年は、道路にポンと置き去りにされたベッドをちらっと見て通りすぎようとしました。するとそこに、置物みたいにねそべっている人がいるではありませんか。

……えっ、な、なんだこの人。こんなとこにねてるよ。いったい。何してるんだ？

①学生の顔は、そういっていました。

……あなたを待っていたんですよ。

ててこい、未来のリーダーたち。四谷大塚

と、いいだしたくなるのをこらえて、②タチバナさんは目があった瞬間、大声で叫びました。

「すみませーん！」

まず、この一声で相手の足を止めなければなりません。

よほど考えごとに熱中している人とか、耳の遠い人でないかぎり、たいがいの人はこの一声で立ち止まります。

「えっ？」

と、学生はびっくりした顔で立ち止まりました。

「あのー」

タチバナさんは［A］笑っていいました。

「きみは駅の方へいくんですか？」

「はあ……」

「駅の方へいくんでしたら、駅までおしてってくれませんか？」

こういわれて、きがるに車をおしてくれる人は少ないのです。たいがいの人は、ちょっといそいでいるからとか、なにやかやと理由をつけて、いそがしそうに去っていきます。

「この車をおしていってほしいんです」

「えっ？」

にきびづらの青年はめんくらった顔をして、それから、［B］とつけくわえました。

「あのー、おれは駅のてまえまでしか……」

タチバナさんは相手に最後までいわせずに、こういいます。

「あ、それでけっこうです」

「はぁ……」

学生は［C］ハンドルに手をかけました。

「あ、あれ？　動かない……」

「ブレーキがかかってるんですよ。横についている、そ、それそれ。それを前へたおして、そ、それでスタート」

ベッド式の車は、ゆっくりと動きだしました。学生はだまっておしていきます。

「ぼく、骨がおれやすいから、なるべく静かにたのみますね」

「……」

「いい天気ですね、今日は」

「はぁ……」

「こんな日に家でくすぶってるの、もったいないっていう気にならない？」

「はあ……」

なかなか会話がはずみません。

「これから中央町の友だちのところへいくんですよ」

「えっ、中央町！」

と、③青年がすっとんきょうな声をあげました。

「お、おれはそこの予備校までしか……」

「いいんですよ、そこまでで」

「でも、どうやっていくんですか？　中央町は、だいぶ遠いですよ」

「こうやっていくんですよ。千里の道も一歩からっていうじゃないですか。ぼくは歩けないから、こうしてみなさんのお力をお借りして歩くんです」

「大変だなぁ」

「べつに。だって、ぼくはこうしてねそべっているだけですから」

「そりゃそうでしょうけど……」

ふたりはだんだんなれてきて、おしゃべりがはずんできました。

「きみは浪人生？」

「ええ。二浪です」

「大学受験に二回も失敗したのかぁ……。大変だなぁ。きみの苦労にくらべたら、ぼくなどうんと楽な生活してるかもしれないよ」

「そんなことないですよ。だって、おれなんかどこも悪くないし……。でも、正直いうと、おれ、必死なんです。もう、あとがないって感じで……」

「うーん。五体満足でも、④生きていくってなかなか大変なんだ」

駅近くの予備校の前まできたときには、ふたりはすっかりうちとけていました。

でてこい、未来のリーダーたち。
四谷大塚

「ここだね、きみの予備校」
「ええ、そうです。おれ、駅までおくりますよ。時間あるから」
「ありがとう。でも、ここまでといんだ。つぎの人を待つから」
「それだったら、えんりょしないでください。待ってたら、いつになるかわからないですよ」
「いいの、いいの。いそぐ旅じゃないから」
「はぁ……。いいんですか、ほんとに？」
「うん、ほんとにいいんだよ。⑤えんりょじゃないんだ。このやきは、また別の人にたのむから」
「だったら、おれがおしてあげますよ」
「いや、きみはここまでの人。ここからはまたつぎの人。そしたら、ぼくはもうひとり、また別の人と知りあえるだろ」
「はぁ……」
「いつも家にいるから、こんなときに、いろんな人とおしゃべりしたいんだ。いろんな人と出会えるって、楽しいじゃないか」
「あ、そうか。そうですね！」
「つきあってくれて、ありがとう。よかったら、そこにぶらさがってるノートに、きみの名まえと住所を書いておいてくれないか」
「あ、これですね」
学生はノートをひらきました。
「わあ、ずいぶん書いてありますね！」
学生はそこにならんでいる、たくさんの名まえをじっと見つめていました。そして、自分の名まえを書きおえると、ちょっとてれくさそうな顔をして早口でいいました。
「お、おれ、今日、⑥あなたに会えてよかったです。ちょっと、落ちこんでたもんで……。それじゃ、気をつけて」

（丘修三「口で歩く」〈小峰書店〉より）

問一 ◎ A ～ C にあてはまる言葉を次から選び、それぞれ記号で答えなさい。
ア　ぎょろり　イ　にっこり　ウ　しぶしぶ　エ　ぼそぼそ　オ　げらげら

問二 ◎ ――線①「学生の顔は、そういっていました」とありますが、
1　このときの学生の気持ちとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。
ア　戸惑い　イ　悲痛　ウ　後悔　エ　怒り
2　1のような気持ちになったのはどうしてですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。
ア　誰もいないと思って口笛をふいていたのに、聞いている人がいたから。
イ　道路にベッドがあることだけでも迷惑なのに、声までかけられたから。
ウ　ありえない場所にベッドがあり、そこに思わぬ姿で人がいたから。
エ　道路に置いてあるベッドに置物があると思ったら人だったから。

問三 ◎ ――線②「タチバナさんは目があった瞬間、大声で叫びました」とありますが、タチバナさんがこのようなことをした目的は何ですか。次のように説明するとき、空欄にあてはまる言葉を文章中から指定された字数でさがし、それぞれぬき出して答えなさい。
・大声であいさつをして［ 1　七字 ］で、「駅まで［ 2　十三字 ］」とお願いするため。

問四 ◎ ――線③「青年がすっとんきょうな声をあげました」とありますが、それはどうしてですか。あてはまるものを次から二つ選び、記号で答えなさい。
ア　自分一人では移動できないのに遠くまで行こうとしていることが、信じられなかったから。
イ　自分に中央町までベッドを押させようとしていることがわかり、不愉快になったから。

でてこい、未来のリーダーたち。四谷大塚

ウ　自分一人だけで遠い中央町に行こうとしているタチバナさんに感心したから。
エ　人の力を借りて長い道のりを移動しようとしていることに、絶望したから。
オ　タチバナさんが自分の目的地よりもずっと遠いところまで行くと聞き、驚いたから。

問五 ⑤ ――線④「生きていくってなかなか大変」とありますが、タチバナさんは学生のどんなことが「大変」だと感じていますか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　大学受験に二回も失敗し、家族にはずかしくて顔向けできないこと。
イ　大学受験を何度も失敗して、これ以上失敗できないと追いつめられた気持ちでいること。
ウ　大学受験を失敗したにもかかわらず、まだ勉強を続けなければならないこと。
エ　大学受験のための勉強をしたいのに、タチバナさんを送っていかなければならないこと。

問六 ⑫ ――線⑤「えんりょじゃないんだ。このさきは、また別の人にたのむから」とありますが、タチバナさんは、学生に「えんりょ」したのではなく「別の人にたのむ」と言っています。では、タチバナさんがわざわざ「別の人にたのむ」のはどうしてですか。文章中の言葉を使って四十字以内で答えなさい。

問七 ⑥ ――線⑥「あなたに会えてよかった」という言葉にこめられた学生の気持ちとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　とても大変な境遇にありながら、明るく生きているタチバナさんの姿に心を打たれ、自分もタチバナさんを見習ってがんばろうと決意を新たにしている。
イ　タチバナさんの日々の苦労に比べれば自分の抱えている悩みなどとても小さいので、悩みを解決するには勉強するしかないと納得している。
ウ　偶然出会ったタチバナさんから自分の知らない世界があることを教えてもらい、勉強する楽しさを改めて感じることができたので感謝している。
エ　タチバナさんは中央町まで行かなければならないので、自分が早く予備校に行かなければタチバナさんが出発できないと焦っている。

4 ⑭ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

五年生は二クラスしかなくて、飼育委員は各クラス一名ずつ。

わたしと光一くんだった。

最初、①がっかりした。

□なんて言葉をまだ知らなかったけれど、本当に身体の力が抜けるような気がした。

飼育委員で、しかも相手が男の子なんて、最低、最悪だ。動物の世話を真面目にしてくれる男の子なんているわけがない、と、わたしは思い込んでいたのだ。

光一くんも、じゃんけんかくじ引きで無理やり押し付けられたロだろう。きっと、すごくいいかげんで、無責任で、途中で仕事を放棄することだって十分に考えられる。

覚悟しなくちゃ。

わたしは覚悟した。

ウサギもニワトリも、世話をしてやる者がいなければ死んでしまう。殺すわけにはいかない。

四谷大塚　でてこい、未来のリーダーたち。

自分に預けられた生命を無視できるほど、わたしは図太くはなかった。優しいわけではない。『わたしのせいで殺してしまった』なんて思いを引きずりたくないのだ。図太くないうえに、誰かに上手に責任転嫁できるほど器用でもなかったのだ。

不器用で、生真面目で、融通がきかない。

付き合い難い人だ、かわいげのない子だと言われていた。でも、しょうがない。②これが、わたしだ。

不器用でも、生真面目でも、融通がきかなくても、わたしはわたしを生きるしかない。

わたしは、開き直ったように、でもどこか頑なに十一歳を生きていた。今でもまだ、そういうところはあるけれど、思い込みの強い性質なのだ。

光一くんに会って、変わった。

光一くんが変えてくれた。

「円藤って、③飄々としてるね」

ウサギ小屋の掃除をしながら光一くんに言われたことがある。飄々の意味がわからなかった。

糞を掃き集めていた手を止め、わたしは振り向く。光一くんがわたしを見上げていた。

目が合った。

柔らかな淡い眸だ。

光一くんと目を合わせたのは、このときが初めてだった。

「飄々って？」

わたしが尋ねる。光一くんが首を傾げる。

「うーん。大らかってことかなぁ。あんまり、ごちゃごちゃこだわらない、みたいな……感じかな」

「そんなことないよ」

大声で否定していた。

自分で自分の声に驚いてしまった。

ウサギの糞の臭いが鼻孔に広がって、咳き込む。

ごほっ、ごほごほ。

「円藤、だいじょうぶか？」

「うん……だいじょうぶ。ちょっと……④びっくりしただけ」

「びっくりするようなこと、言ったっけ？」

「言ったよ」

わたしは臭いにむせて、また、咳いていた。

⑤光一くんが片手でわたしの背中を叩く。これにも、驚いた。もう五年生だ。男子と女子の距離が何となく開いていく時期だった。距離の取り方をみんな、手探りしている時期だった。

こんなにあっさりと背中を叩いてくれるなんて、叩けるなんて不思議だ。

「何を言ったかなあ」

背中を叩きながら、光一くんが呟く。妙にのんびりした口調だった。光一くんに合わせるように、となりのニワトリ小屋で雄鶏のコースケがのんびりと鳴いた。

コケー、コケーッコー。

おかしい。

おかしくてたまらない。

噴き出してしまった。笑いが止まらない。

「えー、今度は笑うわけかぁ。どうしたらいいんだろうなぁ」

光一くんの一言に、わたしはさらに笑いを誘われる。

おかしい、おかしい。ほんと、おかしい。

何て、おもしろい人だろう。

何て、ヘンテコで愉快な人だろう。

知らなかった。

下野原光一くんて、こんな人だったんだ。

笑いながら、⑥わたしの心は、ほわりと軽くも温かくなって行く。

心地よかった。

光一くんは、飼育委員の仕事を怠けなかった。いいかげんに済ますことも手を抜くこともしなかった。むしろ、わたしより熱心に取り組んでいた。

【あさのあつこ「下野原光一くんについて」（ナツイチ製作委員会 編『あの日、君と Girls』〈集英社〉所収）より】

四年国語（組分け）（その六）

（20−9・4・27）

問一⑱ ——線①「がっかりした」とありますが、

1 わたしが「がっかりした」のはどうしてですか。次のように説明するとき、空欄にあてはまる言葉を文章中から指定された字数でさがし、それぞれぬき出して答えなさい。

・男の子が［Ⅰ 十五字］わけはないと思え、動物の［Ⅱ 二字］を自分一人で預からなければいけないと考えたから。

2 ［　　］（5行め）にあてはまる、「がっかり」することを表す熟語として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 動揺　イ 落着　ウ 落胆　エ 脱帽

問二⑥ ——線②「これが、わたしだ」とありますが、わたしはどんな子だというのですか。次のように説明するとき、空欄にあてはまる言葉を文章中から十八字でさがし、はじめの五字をぬき出して答えなさい。

・かわいげがないので付き合い難いと思われてしまう［十八字］子。

問三⑫ ——線③「飄々としてる」とありますが、光一くんはわたしをどんな子だと考えていますか。文章中の言葉を使って三十字以内で答えなさい。

問四⑥ ——線④「びっくりしただけ」とありますが、「びっくりした」のはどうしてですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 自分自身では思ってもいなかったことを光一くんに言われたから。
イ 男子なのにわたしのことを的確に表す難しい言葉を知っていたから。
ウ 同い年の男子の光一くんが突然大人びた言葉で正しいことを言ったから。
エ 作業していることを忘れてウサギの糞の臭いをすいこんでしまったから。

問五⑥ ——線⑤「光一くんが片手でわたしの背中を叩く。これにも、驚いた」のはどうしてですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 五年生になると男子と女子はお互いにいがみ合うようになるので、わざと背中をたたかれたことに腹が立ったから。
イ 五年生になると男子と女子がどう付き合えばいいか戸惑う時期なのに、女子である自分に自然に関わってくれたから。
ウ 五年生になると男子も女子も自己主張が激しくなって衝突するので、相手の欠点ばかり気にするようになるから。
エ 五年生になると男子と女子は一緒に遊ばなくなるので、男子の遊びかたが乱暴になったことを知らなかったから。

問六⑥ ——線⑥「わたしの心は、ほわりと軽くも温かくなって行く」とはどういうことですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 光一くんがいっしょうけんめい仕事をしてくれたので、わたしの負担が少なくなったということ。
イ 本当はやりたくなかった飼育委員だが、動物たちとのふれあいによって心がいやされたということ。
ウ 自分について意固地に考えていたわたしの気持ちが、光一くんと話すことで和らいだということ。
エ 動物に対するていねいな仕事ぶりを見て、嫌なやつだと思っていた光一くんを見直したということ。

でてこい、未来のリーダーたち。
四谷大塚